2004年3月1日

セミナー通信　Ｖｏｌ．１１９　西村セミナールーム

主宰　西村　和彦

弥生　三月　March

日本では３月が年度末となることが多くあります。

寒かった冬を越えて暖かくなり始める季節だからでしょうか。四季がはっきりしたこの国では、米作りと結びついて一年というのが動いているような気がします。稲作だけでなく、冬の間は活動を控えていた虫や動物たちも、この季節を待ちわびたかのように動き出します。

塾も中学生クラスは今月からスタートです。卒塾する中３はまだこの先に公立高校の入試が控えていますが、それとて高校への「入学」試験であって、決してゴールではないのです。これから３年間のスタートに立つために蝶が羽化をするようなものでしょう。大切なのは広げた自分の羽で青空に飛び立つことなのですから。

ただ、春とは決して麗らかな日差しの日ばかりではありません。寒の戻りや三寒四温、一雨ごとに暖かくなるのがこの季節でもあります。春の雨は大地を潤すばかりでなく、遠く大陸から降る黄砂や花粉も洗い流してくれます。陽の光だけでは生き物は育たないのです。

塾は毎年同じ事をしているようにみえますが、毎年なにがしかを変えて新年度に臨んでいます。それは単に教科書の変化に合わせて教材を変えるなどということばかりではありません。今、目の前の塾生にとって何が一番必要なのかを考えつつ軌道修正をしているのです。

今年度は「授業（人の話）を聞ける塾生に早く育てる」ことが一つの目標です。あまりにも当たり前のことのように思われるかもしれませんが、実はこれができるようになるまでに例年２、３ヶ月かかっていました。もちろん私の要求するレベルは、喋らずに座っているという事ではなく、あくまでも話の内容をしっかり理解する聞き方を身につけて欲しいというものですが、今までは「そのうち塾の授業にも慣れますよ」ということで特に手をかけてはいませんでした。ところが、ある方から「今の子供たちにとって、人の話を聞くには訓練が必要です」という話を伺って、目から鱗が落ちる思いがしました。

テレビやビデオ、ゲームに「育てられた」子供たちには、生身の人間の話す内容から必要な情報を聞き取り、メモを取って理解するという作業を身につけることがいかに困難であるかということに、私は気がつきませんでした。

今年で開塾１０年目を迎えますが、「人を教える」という道があるとするならば、まだまだ私自身が修行中の身であるということを痛感させられる経験でした。

吉野山　こぞのしをりの　道かへて　まだ見ぬかたの　花を尋ねむ

西行法師